

作品名：ミミズの腐れ縁

草野 勉

(神奈川県人間科学部 教務補助)

Email: b.kusano<at mark>gmail.com

[何が錯視なのか]

ウィンドウ中央の点の左右で、2本の赤斜線（ミミズ）が交互に上下運動をしています。これを中央の点を凝視しながら観察すると、ふとしたタイミングで2本のミミズが水平方向に漂いだして、あたかも互いに近づいたり遠ざかったりするように見えます。しかし、ミミズは上下運動しているだけなので、決して距離を縮めたり遠ざかったりすることはありません。観察印象としても、近づいているな...と思いきや、ふと元の距離感に戻る、という奇妙な印象を受けます。このとき、なんとも言えない「騙された」感を受けます。以上をまとめると、

- 物理的には上下運動する斜線
- 斜線が水平方向に動くように知覚される
- 水平方向の動きにしたがって、互いに「近づいて（遠ざかって）いる」印象があるのに、ふと気づくと元々知覚されていた距離感に戻る。
- このときに、「騙された」感がある。

[観察方法]

できれば全画面表示で、凝視点周囲の灰色の円が視角 1° 以上になる観察距離で観察していただくと、水平方向の運動が知覚されやすいと感じました。

[解釈]

(1) 上下運動が水平運動に知覚されることの説明

背景がない場合には、ミミズは上下端点の運動方向と同じ上下運動をするよう見えます。このときには、窓問題を解決するために上下端点の運動方向を利用して、多義的な線分内の運動方向を解決していると考えられます。

しかし、背景があるときには、下図の通り、(t1) 秒のときの「白・赤・

白」と (t1+d) 秒後の「白・赤・白」とを対応させることで、水平方向の運動として解釈する傾向が強くなる、と考えることができるのではと思います。

(2) ふと元の距離感に戻る印象

ふと元の距離感に戻る印象は、上述の(1)によって生じた水平方向の移動の印象と、上下端点の垂直方向の運動印象とが競合することによって生じるのではないかと思います。

[意義]

この錯視の意義としては、観察中に生じた距離印象の変化を、ふとした瞬間に自己修正する感覚が味わえる、という点にあると思います。個人的には、Infinite regression 錯視 (Tse, 2006) と似た印象のように感じます。

[錯視名について]

距離感が変わりそうで変わらない感じが「腐れ縁」かな、と思いました。

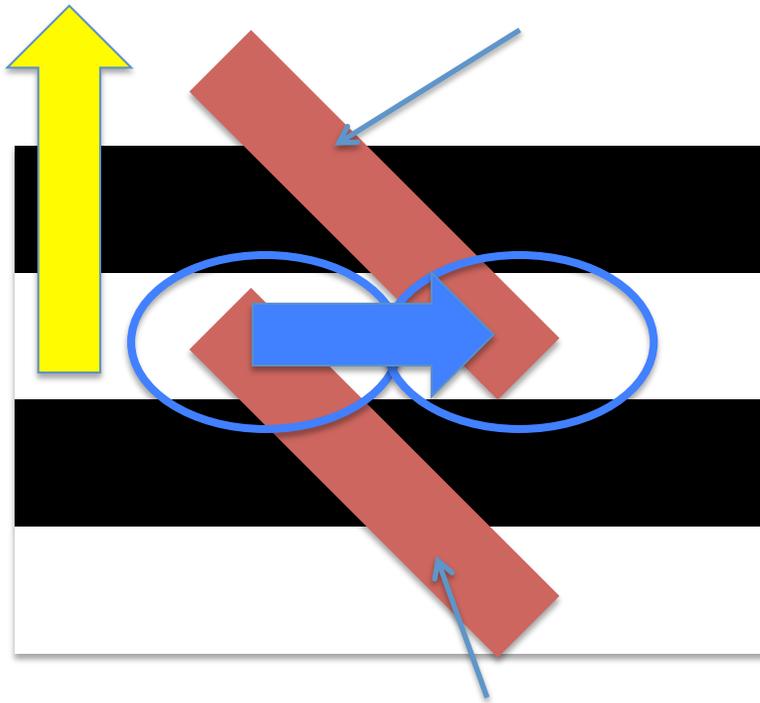
以上です。

[文献]

Tse, P. U., & Hsieh, P. J. (2006). The infinite regress illusion reveals faulty integration of local and global motion signals. *Vision Research*, 46, 3881-3885.

端点の示す運動

(t1+d) 秒



ローカルな

「白・赤・白」の
運動

t1 秒